

幼児から知性と感性の音楽教育を

諸井 誠（作曲家）



昨年度前期夏期研修会での諸井 誠氏の講演をまとめたものです。先生の著書「子どもの楽典」に触れながら現在の音楽教育に欠けているもの、こうありたいというお考えを、例をたくさん挙げながらお話し下さいました。たいへん参考になるものです。

ただ今ご紹介いただきました、諸井でございます。子供の教育ということにつきまして、ピアノを中心にした東音の企画は、昔から注目されておりました。

私は5年間ほどヤマハの音楽教室の相談にあずかり、日本全国のいろいろな教室を拝見する機会を得ましたし、講演会などでも各地へまわりまして視察することも出来ましたので、そのような経験の中から、きょうは、子供の音楽教育について考えていることや感じていることを述べてみたいと思います。

ピアノの特色

まず、子供の音楽というものがあるのかどうかという問題ですが、私の考えではもちろんこれは非常に微妙な問題ですが、音楽は結局1つなだから子供の音楽、大人の音楽と区別する必要がないように思います。

それと、教育音楽と普通一般の生活の中の音楽とを区別することはおかしいと思います。現在は、ポピュラーとクラシックの垣根がだんだんなくなって来て、音楽が次第に1つの輪の中にとけ合ってきたことは好ましい傾向だと思います。

我々作曲家は5線譜の音楽でめしをくっているのですが、近頃は5線譜を使わないノーティーションという問題がありますが、他の芸術との結合、中には数学と密接なものや、絵画と一体化した楽譜があります。その中でピアニストということを考えてみますと、他の演奏家とは違う特別な問題があると思います。ピアノという楽器は、2つの手、10本の指だけで、広い音域を多層的に表現することが可能です。クラリネットとかフルートなどと違って和音も簡単に出来るし、本来なら何人でも作らなければならない音楽を1人で全部表現できるというメリットがピアノにはあります。と同時にオーケストラと完全に力の上で均衡できるだけのパワーも持っているほど大きな音がでるのです。表現的にもクラシックからロ

ーマン派、現代を通じて多方面の音楽的表現が出来るのです。

今日、ピアノ教育は社会的に流行していますが、しかしこれは音楽の中で1つの特別の分野をつくっていると思うのです。逆に言うとう危険性を持っていると思われる。と申しますのは、バイオリニストとか歌手などは、自分が孤独で音楽を完成するということは少なく、常に伴奏やアンサンブルなどを伴う状態で完成させるので、必ず誰かと一緒にやるのですが、ピアニストはまったく孤独で十分完成させ得るのです。ですから、ピアニストは作曲家の次に孤独な職業だと思うのです。だが、作曲家は、創作する時は1人ですが、作った後では演奏家との交流が必ずあります。しかし、ピアニストの場合は、他との接触がなくても生活できるのです。演奏する作品も今日的である必要もありません。

絵描きの人々と話していると感じるのですが、彼らは芸術活動をするのに現代をいっさい考えずに生活が成り立つということが不思議でならないようなのです。絵を描くということは、画布にえのぐをぬって、それを人々に見てもらう。音楽の場合は演奏行為の中で楽譜が媒体になって時代を越えて様々な形で聴衆にかたりかけてくる。現在生きている作曲家の作品を演奏する場合には直接本人から意見を聞いたりできるが、死んでしまった作曲家のものはどのように料理しても良く、演奏してしまえばすべて後の祭り。

楽譜の読み方

そこで楽譜という媒体が演奏家にどの程度まで正しく把握されるかどうかということが大きな問題になります。昔は楽譜というものがなく、グレゴリオ聖歌などは口うつしに伝えられたのですが、12～13世紀頃から楽譜という完全な形のものが作られ始めてから現代では隔々まで楽譜に現わし得るようになりました。

例えば、バッハの楽譜などは、音符の高さと長さは表わされているが、他のニュアンスとしてどうその音を引き出そうか細かい点まではほとんど書いてないのです。ところが、今は記号や略号で微に入り細に入り書くことが出来ます。それでも、音楽には解釈という可能性が出てくるのです。

教育にタッチされている方々で、一番最初におこる問題は、楽譜を正しく読む方法をいかに教えるかだと思います。私が大学で教えていて、正しく把握しているかどうか、時々ためしてみると、作曲の理論の時、簡単なバイエルかなんかを實際弾かせてみて、完璧にテンポが正しくとらえられているのは少ないのです。学生は、高さと言きだけの無味乾燥な演奏をし、ニュアンスや強弱などは2次3次的なものが多いですね。リズムとテンポとピッチ、この3つだけで、本当はここからスタートするのですが、いつまでもこれだけでリストやショパンの段階まで同じように進んでいるのです。進歩がないのです。

文字は、以前として重要な役割をはたしています。楽譜は大抵イタリア語ですが、ドイツ語やフランス語もあり、モーリス・ラベルのものはほとんどフランス語ですし、シューマンやベートーヴェン後期のものはドイツ語で書かれています。ドイツ語の意味をまったく知らずシューマンを弾いていたりするのも事実で、昔からくり返し弾かれてきたためこういう風に弾くものだと頭の中に入っているのです。この曲は習慣的に弾いていることが多いと思われます。ですから、楽譜を読む段階では、もうレコード等でイメージされているので、楽譜のこの表示はどのように表現したらよいかなどという細かい点は考えないのです。それはそれなりに正しいことかも知れませんが、作曲家としては、これはたいへん困るんで作曲家は自分の考えを楽譜にすべて表示するのですから、その楽譜を深く読んでいただかないと正しく作曲家の思いを表現し得ないということになりはしないかと危惧するのです。同時に、作曲家がこの楽譜で何をねらっているかということ、同じ表示でもこの作曲家の場合は何を要求しているかというその作曲家のスタイルを把握してもらわないと困るのです。

よく経験することですが、作品をつくって、オーケストラを並べ、初めて音にする。そういう時、休憩時間などに、メンバーから「ここはどういう意味だ」と聞かれますが、これはうれしいと同時に恐いことでもあるのです。というのも、演奏家の中には、楽譜の中に詳しく書いてあるにもかかわらず、楽譜をよく読まずに聞く人が多いということです。あいまに楽譜を読む習慣を身につけている人が多いようです。

また、楽譜の中に書かれていない部分というのも非常

に多いのです。楽譜にどれくらい信頼性があるかどうかというと、これもまた実際に100%ということはないわけです。例えば、ベートーヴェンの「ハンマークラヴィアソナタ」の一部の音がシャープなのかナチュラルなのか今だに議論されているのです。楽譜を信用して、印刷された楽譜が絶対だと思えば、その通りに演奏したとしても良いはずなのですが、「ハンマークラヴィアソナタ」ほどの作品になるとそうはいかないのです。何冊かの楽譜を検討して、自分はこちらの方がよいと思うという自分なりの意見を持たなければなりません。和声法とかベートーヴェンのスタイルなどや音の好みなど、別の方向から攻めていって理解する必要もできます。

ピアニストの諸問題

ピアニストの場合、往々にしておこる問題は、ピアノ以外の音楽に目を向けられないということです。作曲家は、カルテット、シンフォニーなども書いているのですからそのたくさんの中から演繹的に見て行けば、後期ベートーヴェンの様式はどんなものか、独特のニュアンスなどがわかってきます。作曲家の姿勢とか好みというものを楽譜の中から読みとっていただかないと正しい演奏はできないと考えられます。「ハンマークラヴィアソナタ」それだけを読みとってだめなんで、なんであんなバカテカイ曲を書いたのか？ということも1つの大きな問題になりますし、同時にベートーヴェンの形式が宗教を通じてどのように変化していったか、ということ等がポイントになると思います。

ですから、楽譜を解釈することは、1つの曲を弾くことだけに気をとられていてはだめで、その周りも見なければならぬということがあるわけです。わりとこのピアノの学生は他のことに興味を示さない傾向があるようです。まあピアノだけでもたいへんだと思うのですが、オペラとか声楽にも目を向けてほしいものです。というのは、歌を歌う喜びを知らずに育つという形でも、息を吸うということがわからないというより根本的な面での欠陥があるわけなのです。ピアノを弾くことが息を吸うことと結びつかないということがあるのです。自分とまったく関係ないと思っている人が多いようです。

昔、畑中良輔を講師に「ピアニストのための呼吸法」という題で講習会を行ったことがあります。ピアノの先生方を立たせて、声楽と同じ基本的な訓練をさせたのです。その時まで、ピアニストも息をしていたのだということをおぼろげに覚えていた人が多く、改めて認識して驚いた人も多かったようです。そしてこのような企画をした私のねらいも正しかったと思ったものでした。

つまり、指でピアノを演奏することが出来るということとは、息と関係なくスイッチを押すように音を出すこと



が出来るということで、息は息、ピアノはピアノと関係なくやれるということです。ところが、旋律というのは、息をするポイントというものがあるので、それも楽譜の中に書いてあるのですが、音大へ来る学生でもスラーの意味すらも見ないで、息をするのを忘れた人が多いようです。クラリネットやフルートの奏者なら必ずどこで息を吸うかが決まっています、それがまず第一になるのですが、ピアノだけが息を吸うことを忘れてるのは大きい問題だと思います。バイエルの段階から息を吸うことを教えないとだめで、これも楽譜を読むことの中に入っているのです。

「子どもの楽典」について

たまたま、全音という出版社からたのまれました、バイエルからソナチネ程度までのレベルの人たちの楽典の本を出版しました。その時考えたことは、前にも述べましたが、子供の音楽があるかどうか、子供のための楽典があるかどうか考えてみたのですが、教育のプロセスとしての上下はあるにしても、子供の段階から大人と同じことを教わるわけですので、子供だけの楽典というものはないのです。結局は、いかにやさしくおもしろく分からせるかということが問題になると考えたわけです。楽譜を読むことでどのくらい視野を広げてやる事が出来るか、オーケストラやカルテットなどの楽譜にも触れなければならない。また、従来の楽典の中には、たいくつでつらい勉強だという面ばかり強調しているようなものがありますが、それをいかに抵抗感を少なくして、いかにおもしろく勉強させるか、ということもまた考えました。そのための工夫もありますが、その1つは、普通の楽典は音符の長さは長さ、高さは高さというように全部一まとめにしてありますが、この本を作るときは、たえず全貌に触れるようにして段階的に重ねて行けるようにしました。

また、音の長さでは32分音符とか64分音符というような、あまり使わない音符はさげたり、4分、8分音符を勉強したらそれと同じグレードでのピッチも考えるべき

だし、強弱についてもト音記号についても考えるというようにトータルなものと考えて編成しました。4つのグレードに分けてあります。上下2グレードずつです。

冒頭にいきなり2段のピアノの楽譜を出して、いろいろ引き出し、どれは何ページをみれば書いてあるというようにしてあります。ここでまず全ての記号をトータルにながめることが出来るようにしたのです。この考え方の基本にあるのは、音楽を1つ1つの分野に分けてしまって構成してまとめるとよいという考え方を持たせず、最初から全貌をとらえることを学ばせたかったということ、全貌を常に正しくとらえて反復しないと楽典が実際の音楽から遊離してしまうのではないかと考えたからです。また、分解することですまらぬ印象を与えてしまうのではないかとも思ったのです。

もう1つの工夫は、文字の色を茶色にしたという点で、しかも文字の大きさも大小2種類にしてあります。これは、パートは黒で、あくまでも主役は楽譜だということ強調し、絶えず認識させるということです。文字を大小に分けたのは、大きい方は子供たちが読み、小さい方は先生や父兄が読んで指導されるように考えたのです。

それとできるだけとつき易くするために、イラストを入れたりして絵本のように処理しました。また、クロスワードパズルのようなものを解きながら、つまり遊びながら覚えてしまうことが出来るようになっているページもあります。このアイディアは、NHK教育番組の「セサミストリート」をみて、非常にうまいと感じたことから生まれました。

音楽教育の現状

最初にこの本を使い始めたのは、私の教えている大学の学生でした。最近の大学生はどういう精神構造になっているのか、少年ジャンプやマーガレットをかかえて歩くことが流行しているようで、この楽典も彼らには抵抗感はないだろうと思っていましたら、最初一斉に『わぁ／』というんですね。そこで、『わぁと言うんだったら、どこでもいいから1ページを開いてその隅から隅まで全部知っていたら私が上下座しよう。もし1つでも知らないものがあったら君達が上下座するんだぞ』と言ったのですが、結局学生が土下座しなければならなくなったのです。完璧に覚えるということがいかにたいへんか、今の学生は見かけは立派ですが中味は子供とたいして変わらないようです。私の大学に舞台学科というのがあって私はそこでもこの楽典を使って教えています。なかなか好評ですよ。

前に述べましたように、各地で教えている現場を見てももらったことがあります。ある町の音楽教室へ行った時のこと、中年の女の先生が20人ほどの生徒を相手に、

まず手でパンパンと拍子をとって子供にも同じようにたたかせるのです。子供は面倒くさそうにしたり、窓の方を見てパンパンと真似をしているだけです。その次に、ピアノで弾いてみせて、最後に黒板にドレミレドレミ…と書きました。これを全部合わせると「めだかの学校」が出来上がるというわけで、「めだかの学校」が出てくるまで15分ぐらいもかかっているのです。『これはまいったなあ。』と思いましたね。この先生は、音楽を1つ1つの要素に分解して教えて、後でまとめる音楽になるという考え方がるのです。たしかに、分解すると簡単にはなりますが、しかし、この場合はかえってむずかしくなってしまうと感じましたね。

もう1つ、富岡という所で、若い大学を卒業したばかりらしい女の先生の授業をみたのですが、ものすごくうまいですね。全然たいくつさせず、カンどころをおさえていて、音楽が息をしているという状態なのです。これをみますと、教育経験はあまり関係ないで、先天的にうまい人はうまく、だめなやつは何年やってもだめだと思いましたね。だめなやつを出きるようにするのは、ある程度は教育段階でできるのですが、しかし先生の手を離れたら生涯だめはだめなんじゃないかと思ったりします。これと同じで、楽譜をうかつに読む習慣を身につけると、一生うかつに読むようになります。

それでは、楽譜をきちんと読むということはどういうことかという、楽譜からその作曲家が何を言わんとしているか正しく読みとり、解釈することが大切なのであって、読む段階でちゃんと楽譜を読んでいないと解釈できないのです。

現状では、先生自身が、自分が先生から教わったことしか教えないということがしばしばあります。これがずっと続いたらどうなるか？考えてみると恐しい現象であると思います。大先生、つまり親ガメの背中に先生、子ガメが乗り、子ガメの上に孫ガメ、孫ガメの上に曾孫ガメというようにどんどん重なって、最後になくなっちゃったりして。また、大先生がこけたら全部がひっくり返ってしまう懸念があります。子ガメが親ガメより進んでいなければ発展がないのであり、1を聞き10を知るようでない困るわけです。ところが、10から1を知るあほうに、あんまりむきになって教えてしまうと、生涯10から1しか知りませんが、それでも自分が出来ると思っちゃうわけです。自分が10だと思って卒業して行っていぼってるわけです。音痴だと返って自分が音痴だと思わないのでして、そんな人に限ってピッチが正しくとれば音痴でないと思っていて、強さについてまったく関係なく生きている音痴というのがいる。

ソ連に行くときピアノという楽器は、ピアノフォルテと言うそうですが、これの省略がピアノと言う名前になっ

たそうです。（これはある男が言っていたので、本当かどうか、確かめていないが）ピアニストだからといって生涯ピアノ（弱く）でしか弾かない小心者がいたりして。それでいて関係ない時にけいれん的にフォルテになったりしてね。

表現と知識の一体化を

教育は先生より偉い人をつくるのが大切であります。そうでないと教育とは言えないんですが、日本の現状では、自分より偉くなりそうになるとペッパーッとやっただめにしてしまう。じゃ、なぜ教育をするかと言うと、月謝をとるためだった、なんてことになるかもしれないような現実があるようです。これが、音楽教育が批判される原因になっているのではないのでしょうか。

私なんか、まだ自分より偉い作曲家をつくらせていないので、完全に失敗したと思っているのですが、失敗は失敗なりに、その経験の中からのいろいろな事を学んで今後に生かしたいと思っております。

音楽を知識としてだけ考えると非常に危険なんです。例えば、ドルチェは甘いんだ、やわらかくてスイートなんだというイタリア語の意味だけでとって、『自分はドルチェに弾きました』と言うやつがいる。自分はドルチェに弾いているつもりで表現に結びついていないのです。これではいけないんで、表現と知識が絶えず一体化していないと具合が悪いのです。しかし、知識は知識、音楽は音楽と別々にする傾向が日本の教育の中にあるようです。

不思議なことに、教育音楽というのは、（専門家がここにいたらしかられるかもしれませんが）どうしてこれは良いあれは悪いというように分けるのでしょうかね。音楽はどんなものでもその素材になるんであって、もっと開かれた音楽であるべきであり、今の教育状況だと実際の音楽と結びつかないことが多いのです。これは文部省のコントラクションの失敗だろうと思います。

もし音楽を考えているならば、先生というのは本来教科書を教えるのではなく、教科書を作る側なんだと思います。先生たるもの、教科書通りに教えるのではなく、子供に合った段階で、これを覚えさせようとならねえが決めたら、それに適した問題を先生が作れば1番いいわけなんです。音楽なんかでも、ある1つの歌を教えようと思ったら、それに該当する歌をいろんな歌集から選ぶことも大切ですが、それよりもっと良いのは自分で作曲して歌わせるということが1番ねらいに合うわけです。誰でも作曲はできますよ。ましてピアノを弾ける先生方であれば、全員作曲できるはずですよ。もちろんそれでめしをくることが出来る作曲家は少ないのですが。

例えば、ヨーロッパの先生方ともつき合いがあります。彼らはすぐ曲を作れるんですね。バイエルなんかで

不足している部分があると、すぐその場で適した問題を作る能力を持っているのです。誰でもというわけではないんですが、私の会った人達はそうでしたね。

トータルな音楽表現が必要

私の相棒で、小林仁というピアニストがいますが、彼は自分ではアマチュアと謙遜しているのですが、相当な曲を作れる人で、ピアノコンチェルトなどすぐにでも作れる人なんです。初見などもあつという間に出来て、僕なんかより能力があると、こちらがはずかしくなってしまう。ピアニストはピアニスト、作曲家、バイオリニストと専門に分けてしまって、そうでなければ困るみたいなのが現状ですが、なぜもっとトータルに、アーティストとして見ないか疑問に思っているのですが。

一般に、ピアニストと言えば、なんか閉鎖された印象を与えています。それでもさしつかえないのでしょうかしかし日だけは開かれていないと具合が悪いようです。

園田さんと外国旅行をしていて感心するのは、彼は必ずその旅行先の町でオペラ劇場をさがすんです。ピアノリサイタルなんか目もくれず、三流のオペラ劇場などを喜んで見ているんです。僕もおもとして見たときのこと、思わず『へたくそだ』と言ってしまったのですが、彼は『ちょっと待て。日本ならこれだけやるのに何10回となく練習するだろうが、彼らはただ1回の練習だけでここまでやれるのだ。』と僕をしかったんです。そして、『三流の音楽は三流なりに楽しみがある。三流に超一流を求めるとつまるものになるんだ。』とも言いました。まことにもっともなことで、超一流の音楽で育つことは大切なことではありますが、専門家とアマチュアとの間にどういう区別があるか、よくよく考えてみると、区別なんかほとんどないと思いますね。この間もN響のトップコントラバス奏者の方と話す機会があったのですが、彼は音楽関係の大学ではなく、早稲田かなんかの英文科を卒業しているんです。その話の中で、現在、早稲田のオーケストラに、3人のトップコントラバスがいる。彼らをN響につれてきたら今すぐ使えると言うんです。しかも、1番2番に上手なのが都合が悪くて聴かれなかったが、3番目の演奏を聴くと、これが実にうまい。この上にまだ2人もいるかと思うと、我々はプロとしてはずかしいと思ったと彼は言うんですね。それを聞いていて、現在はプロとアマの境目はきわどいと感じました。

音大卒という免状だけでことたれりとしている人が多いのですが、これは音楽性とはまったく関係ないんです。私の大学である年など、声学で1番よかったのがピアノ科の生徒だったんです。音楽工学の生徒がホルンがうまかったり、専門とその他の生徒の能力もあまりへだたりはないものです。ですからやれる人が専門家なのであって、やれない人は、そのコースをとっていても専門

家とは言えないんじゃないかと思います。

私の知っているヨーロッパのアマチュアと言われる人たちは、工場の社長とか重役とか、小・中の先生とか、最高裁の判事とかいろいろですが、プロ以上の演奏やある分野に関する知識を持っているのです。ただ、ピアニストはピアノを弾いているだけではだめで、指のバックに深いものがなければ、本当のピアニストとは言えないでしょう。

ジュネス・ムガールという子供の音楽鑑賞団体があるんですが、そこで現代の作家アンドレ・ベルベの「赤道コンチェルト」というピアノコンチェルトを聴かせたのですが、圧倒的に成功しました。子供はチャイコフスキーやベートーヴェンで養われるべきだという考えは大人の考え方であって、子供はその先を行っているわけですよ。『ロックやフォークは音楽じゃない』という大人がいるが、とんでもないことで、メロディーメーカーとしてのビートルズは、20世紀最大の1人だと思っているのですが、狭くて偏見に満ちているこのような音楽の世界では、根本的に具合が悪いと考えます。

普通の音楽のアプローチの仕方は、古典→ロマン派→現代というようになっていますが、本当はこの逆がよいと考えます。モーツァルトなどと平行してバルトークなどにも慣れさせて感覚をみがく必要があります。音楽の中に階級を作って、上の方にベートーヴェンとかバッハがいて、その下方にジプシー音楽のサラサーテかなんか、そのまたずつと下に美空ひばりなんかがいる。『美空ひばりが好きだ』なんて言ったら、『まあ、あの方とはつき合えせんわ』などと壁をつくってしまう。美空ひばりはいやらしいところもあるがいいところもあります。生活の中で、クラシックは特別なものだと思っているようですが、もともとクラシックは、王や貴族がめしきう時、そばで奏したものでした。ですから当時は料理長の次ぐらしい身分でしかなかったんですよ。くう方が先ですからね。バッハなんかも、人件費は今よりずっと安いし、教会の消費としてどんだんカンタータやフーガを作らせられたのです。ですから、音楽は、クラシックであれ、ロックであれ本質的には同じであって、その中のカテゴリーが違うだけだという気がします。

現在、ピアノをめぐる特殊な階級が出ていますが、これは明治時代に西洋音楽が入ってきた時に問題があったんで、日本ではピアノは女の人のものになってしまっているんです。80%ぐらいが女性でしょう。これが日本の音楽の方向に影響を与えているのです。おおいにマンパワーを強める必要がありますね。

私の大学の入試の時、面接をしたんですが、その時、『将来、どういう風になろうとしているの?』と聞いたら『親が音楽教室を建ててくれましたので、そこで教えます。』と言うんで、『過去形だが、もうあるのか?』と尋ねると、『はい』というんで驚いたんですが、この学生は日曜日になると実家へ帰って音楽教室をやっているんです。『月謝はいくらだ?』と聞きますと『1,200円です。』と答えていました。成績表を見ると、超低空飛行で、すれすれなんです、これが。本当に、たくましいというか、驚くことばかりです。この本の紹介をかねて、お話ししてまいりましたが、今後はピアノ副読本なんかも作りたいと考えております。実際この楽典をお使いになりまして、いろいろご意見などや注文をおよせいただければと思います。(大阪芸術大学音楽学部々長)